

ポルトガル語の接続法未来とその習得

—第二言語書き言葉コーパスより—¹⁾

鳥越慎太郎

1. はじめに

本稿では学習者によるポルトガル語の接続法未来の習得について、3種類の大規模学習者コーパスを分析して考察していく。考察は学習者の習熟度別、表現別、母語別の観点から、主に量的に行う。また、データの分析に先立ち、まず接続法未来の形式と用法について概観していく。

2. 接続法未来について

接続法未来とは叙法の一形式である。接続法は西欧諸語で広く見られるが、接続法未来は特にイベロロマンス諸語に見られる形式であり、現代語で用いられているのはポルトガル語に限られるとされる (Fleischman 1982/2009)。本節ではポルトガル語の接続法未来についてまとめる。

2.1. 接続法未来の活用

ポルトガル語の叙法体系は直説法、接続法、命令法に分類され、ヨーロッパポルトガル語ではさらに条件法が加わる。²⁾ このうち、接続法は現在、未来、未完了過去と、それぞれの完了アスペクト (複合過去) 形が存在する。接続法未来は直説法完了過去の3人称複数の形式を元にした語幹と、各人称の活用語尾から構成される。活用語尾に不規則がないため、厳密な意味での不規則活用は存在しないが、語幹の元となる直説法完了過去が不規則な動詞語彙を「不規則動詞」とする事例が見受けられる (e.g. Bechara 2007)。

表 1 接続法未来の活用

不定詞	直説法過去完了が規則活用		直説法過去完了が不規則活用	
	falar	beber	ser / ir	ter
直説法未完了過去3人称複数	falaram	beberam	foram	tiveram
1人称単数	falar	beber	for	tiver
2人称単数	falares	beberes	fores	tiveres
3人称単数	falar	beber	for	tiver
1人称複数	falamos	bebermos	formos	tivermos
2人称複数	falardes	beberdes	fordes	tiverdes
3人称複数	falarem	beberem	forem	tiverem

語幹となる直説法完了過去が規則活用となる動詞 (*falar*, *beber*) は、接続法未来の語幹及び1人称単数と3

人称単数の活用が不定詞と同形となり、接続法未来の活用全体も人称不定詞と同形となる。

2.2. 接続法未来が用いられる表現

本節では接続法未来とその他の接続法形式が用いられる表現を比較し、その特殊性を指摘する。まず、接続法現在には幅広い表現で主に現在と未来からなる非過去時を指示する。以下はその一例である。

- (1) A Maria espera que o Rui chegue a horas. (Maria は Rui が定刻に着くことを期待している)
- (2) Ele volta para que todos fiquem contentes. (彼はみんなが満足するように戻る)

(Mateus et al. 2003, 和訳と下線は本稿筆者による)

次に、接続法未完了過去は、基本的には接続法現在の過去時制として機能する(3)(4)。加えて、非過去時指示の反実仮想表現の条件節でも用いられる(5)。

- (3) A Maria permitiu que os miúdos saíssem. (Maria は子どもたちが外出することを許した)
- (4) Ele voltou para que todos ficassem contentes. (彼はみんなが満足するように戻ってきた)
- (5) Se a Maria estivesse em casa, íamos visitá-la. (もし Maria が家にいたら、会いに行くのに)

(ibid)

これらに対し、接続法未来は特殊である。多くの文法書や教材では接続法未来を「未来に関する事柄について言及する」と定義する (Cunha & Cintra 2007; Raposo et al. 2013; 田所, アイレス & カルヴァーリョ 2013; 富野 & 伊藤 2013; etc.)。しかし、実際には、接続法未完了過去が接続法現在の過去時制として機能する(7)のに対し、接続法未来は接続法現在の未来時制として機能することができない(8)。

- (6) Sinto muito que ele esteja ausente. (彼が不在で残念だ)
- (7) Senti muito que ele estivesse ausente. (彼が不在だったのが残念だった)
- (8) Sentirei muito que ele *estiver ausente. (彼が不在となるだろうことは残念だろう)

(Comrie & Holmback 1984)

接続法未来は接続法現在と時間指示の面では対立せず、用いられる表現に違いがある。第一に、*se* や *quando* によって導入される条件表現(9)、時間表現(10)で用いられる。

- (9) Se a Maria estiver em casa, vamos visitá-la. (もし Maria が家にいたら、会いに行こう)
- (10) Quando começar a trovoadas, desligo o computador. (雷が鳴り始めたら、PC の電源を消す)

(Mateus et al. 2003)

この場合、接続法現在は文法的に許容されない。接続法未来を扱う教材 (e.g. 浜岡 2009, 彌永 2011, Coimbra & Coimbra 2012) に目を通すと、*se* 条件表現が接続法未来の導入で扱われることが多く、学習者にとってのインプットが最も多い表現であると考えられる。

第二に、接続法未来は関係詞節においても用いられる。

(11) O José quer casar com a mulher que tiver muito dinheiro. (José はお金持ちの女性と結婚したがっている)

(Comrie & Holmback 1984)

接続法未来によって表現される関係詞節は、定冠詞を伴う名詞や *o que*、*quem* など無先行詞関係詞などを修飾し、限定された集団における人や物全般を指示する (Comrie & Holmback 1984)。一方で、関係詞節では接続法現在も用いられる。

(12) O José quer casar com uma mulher que tenha muito dinheiro. (José はお金持ちの女性と結婚したがっている)

(ibid)

接続法現在によって表現される関係詞節は不定冠詞を伴い、意味的には不特定または実際に存在しない先行詞を修飾する。なお、接続法現在を用いる関係詞表現と接続法未来を用いる関係詞表現の間では、時間指示による対立は生じていない。

第三に、程度・様態の副詞節表現において用いられる。この表現では接続法現在は許容されない。

(13) Farei como mandares. (君が指示するように行うだろう)

(Cunha & Cintra 2007)

第四に、[接続法現在]+[疑問詞]+[接続法未来]で構成される譲歩の定型表現において用いられる。

(14) Seja quem for, pode participar da festa. (誰であってもパーティーに参加できる)

(15) (中略), mas venha o que vier, comerei tudo. (何が来ようとも全部食べる)

(田所 et al. 2013)

以上の各表現では接続法現在と接続法未来は時間指示では対立していないが、使用される表現が明確に区分されている。最後に、接続法未来と接続法現在が混在する例として、一部の時間表現を挙げる。

(16) Depois que você chegar / chegue, eu vou sair. (あなたが着いた後に、私は外出する)

(Comrie & Holmback 1984)

Depois que、*logo que* などに導入される時間表現では接続法未来と接続法現在のいずれも文法的には許容される。ただし、傾向的には接続法未来が用いられることが多いとされる (Comrie & Holmback 1984)。

以上のように、接続法未来は接続法現在の未来時制ではなく、共通の「非過去」時間を指示する形式であり、両者は時間指示ではなく表現によって使い分けがなされている。³⁾ 多くの教材や文法書 (e.g. Bechara 2007, Cunha & Cintra 2007, Mateus et al. 2003, Raposo et al. 2013) ではこの点について言及せず、両者の違いを直接的に比較しているものが見られない。

3. 第二言語叙法習得研究における接続法未来

第二言語習得における動詞形態素習得研究では、過去時制や完了・未完了のAspect形式を扱う研究 (e.g. Bardovi-Harlig 2000, Salaberry 1999, Ayoun 2005) が多く見られる一方、叙法の習得を扱う研究は事例が少ない。その中で、接続法の習得研究はスペイン語研究において比較的盛んであり、特に2000年代より研究数が増え、方法的にも多様になっている (Collentine 2010)。

このような状況の中にあつて、現代語では接続法未来はポルトガル語に独特の形式であるため、スペイン語習得研究においては関心の対象とならず、ポルトガル語習得研究独特のテーマであると言える。なお、ポルトガル語では Bento (2013) が確認できるところ唯一の接続法習得の事例であるが、接続法未来の習得は特に関心の対象にはなっていない。

4. 研究設問

本研究では学習者コーパスより、接続法未来の使用及び誤用を習熟度別、表現別、母語別に記述し考察していく。習熟度別コーパスを用いることにより、横断的な「使用」ではなく、長期的な「習得」を疑似的に考察していく。データ分析、考察に当たって、さらに以下の四点にも注目していく。

- ① 不定詞に類似しているという形態的特徴から、他の接続法形式と比較して習得が容易なのではないか
- ② インプットが多い *se* 条件表現や *quando* 時間表現に産出、習得が偏りがちなのではないか
- ③ 「接続法の未来時制」として認識され、誤用が多いのではないか
- ④ 学習者の母語からの特徴的な影響は見られるか

4.1. コーパス

本研究で用いる学習者コーパスは、リスボン大学言語学研究所が構築した *Corpora do Português como Língua Estrangeira* (PLE)、⁴⁾ コインブラ大学一般・応用言語学研究所が構築した *Corpus de Produções Escritas de Português como Língua Segunda* (PEAPL2)、⁵⁾ リスボン新大学が構築した *Corpus de Aquisição de Língua Segunda* (CAL2)⁶⁾ の三種を用いる。PLEとPEAPL2は共通の手法によって構築されたコーパスである。CAL2については2015年9月現在公式サイトの詳細ページが閲覧できない状態であるが、PEAPL2のサイトや Bento (2013) によると、CAL2とPEAPL2も共通の手法によって構築されていることが示唆されている。

表 2 各学習者コーパスの詳細

	PLE	PEAPL2	CAL2
収集機関	リスボン大学	コインブラ大学	リスボン新大学
総語数	7万語	12万語	28万語
学習者数、母語数	27母語 397名	39母語 391名	43母語 943名
収集環境	外国語環境	第二言語環境	不明
習熟度区分	CEFR 準拠 3段階	CEFR 準拠 5段階	CEFR 準拠(?) 3段階

被験者は欧州言語共通参照枠 (CEFR) に基づく自己評価アンケートによって習熟度評価がなされている。CEFR では初級より A1、A2、B1、B2、C1、C2 の 6 段階が設定されており、PLE では A1-A2、B1-B2、C1-C2 の 3 段階、PEAPL2 では A1 から C1 までの 5 段階に分けられる。CAL2 では「初級」、「中級」、「上級」の 3 段階に分けられているが、前述の通り CEFR による習熟度評価が示唆されている。この習熟度評価により、単純な大規模データの横断的研究ではなく、疑似的な長期的習得研究 (*pseudolongitudinal study*) を行うことができる。疑似的な長期的研究は実際の習得過程を追ったものではないため、質的研究の長所である学習者を取り巻くダイナミズム (母語、年齢、学習歴、学習環境、既習言語など) が漂白されてしまうというデメリットがあるが、大量データを分析することで質的研究が放棄する信頼性や一般化可能性を補えるメリットがある。

4.2. データ分析

コーパスデータは本稿筆者によって品詞タグ付けプログラムの *TreeTagger*⁷⁾ を用いて品詞情報と見出し語情報が付与されている。タグ付けされたデータは習熟度別に整理され、コンコーダンサー (分析ソフトウェア) の *AntConc* (ver. 3.2.4w)⁸⁾ を用いて分析され、KWIC リストが抽出される。抽出されたリストは *Microsoft Excel 2010*⁹⁾にて半手動で集計される。

5. 分析結果と考察

5.1. 全体的傾向

まずは各コーパスにおける接続法産出の粗頻度をまとめる。

表 3 各コーパスにおける接続法各形式の産出 (粗頻度)

習熟度	PLE			PEAPL2			CAL2		
	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法
	現在	未来	未完了過去	現在	未来	未完了過去	現在	未来	未完了過去
A1				8	1	0			
A2	55	6	13	18	4	6	256	55	67
B1				256	48	102			
B2	93	19	17	38	12	14	347	59	126
C1	47	13	7	35	4	7	355	62	131
合計	195	38	37	355	69	129	958	176	324

ただし粗頻度では全体のサイズが異なる 3 コーパス間及び 3 習熟度間を直接比較することができないため、50000 語あたりの産出に調整した。

表 4 各コースにおける接続法各形式の産出 (50000 語あたり)

習熟度	PLE			PEAPL2			CAL2		
	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法	接続法
	現在	未来	未完了過去	現在	未来	未完了過去	現在	未来	未完了過去
A1	84	9	20	26	3	0	61	13	16
A2				44	10	15			
B1	147	30	27	191	36	76	205	35	75
B2				166	52	61			
C1	183	51	27	264	30	53	171	30	63

表 4 から接続法未来の産出は初級から見られることがわかる。ただし、いずれのコースのいずれの習熟度でも接続法未来の産出は接続法現在の産出と比較して少ない。また、接続法未来と接続法未完了過去の間関係を見ると PLE では中級以降、特に上級で接続法未来の産出が多くなっているのに対し、PEAPL2 と CAL2 では全体的に接続法未完了過去の産出が多くなっている。

各コースとも接続法未来の産出は中級 (B1) 以降に激増している。また、紙幅の関係で割愛するが、各コースとも初級と中級の産出の間にカイ二乗検定で有意差が見られ、中級と上級の間には見られなかった。すなわち、中級が接続法未来の習得に決定的な習熟度であると言える。

5.2. 表現別産出

本節では接続法未来の表現別の産出、及び誤用についてまとめる。表 5 を見ると、時間表現と条件表現における産出が圧倒的に多い。「TLU (*target-like use*)」は *se* 表現や *quando* 表現における、「誤用」はその他表現における接続法未来使用である。これ以外の表現では、関係詞表現における産出や譲歩定型表現の産出が全コースに見られる。一方で様態表現における産出は非常に少なく、CAL2 にしか見られない。

表中、「主節」以下の表現における産出はすべて文法的には許容されない誤用である。誤用は初級にとどまらず、中級でも見られる。まず目立つのが、主節における誤用(17)や、不定詞との混同(18)である。

(17) ... mas se eu não souber ..., não *puder ser feliz. (CAL2, 初級, ドイツ語)

(18) ... assim ficam por oito o nove anos ali, sem *souber nada... (PLE, B1-B2, イタリア語)

主節における誤用は直説法未来や法的動詞語彙 (*poder* など) と混同されているものと考えられる。これには「未来」で共通する文法呼称や、接続法未来と直説法未来の違いを明示的に説明する機会の少なさが影響しているものと考えられる。不定詞との混同は、語幹が規則的な動詞語彙では活用が共通するため、形式的に混同されているものと見られる。

さらに表 5 から、願望・希求表現(19)、命令・使役表現(20)、陳述表現など、接続法未来が許容されない動詞補語節における誤用も多く見られる。

表 5 各コーパスにおける接続法未来の産出 (表現別)

表現	PLE		PEAPL2		CAL2	
	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用
時間表現	7		24		17	3
条件表現	22	1	22		80	
様態表現				1	5	
譲歩表現 (定型表現)	1	1	5		9	3
一般関係詞表現	3		4		15	
主節				1		13
指示関係詞表現				2		4
非指示関係詞表現						1
不定詞		2				9
願望・希求表現				4		4
命令使役表現						4
陳述表現				3		1
真偽判断評価表現				1		
可能性表現						4
反実仮想表現		1		2		2
目的表現						1
結果表現						1
全体	33	5	55	14	126	50

(19) Espero que o gripe suína não *for grave. (PEAPL2, B1, 中国語)

(20) ... se nós ficamos na casa ... vão-nos dizer que *sairmos... (CAL2, 中級, スペイン語)

これらの表現では接続法現在が用いられるべきであり、学習者は発話時と比較した後時的文脈に影響されて、「接続法現在の未来時制」として接続法未来を用いているものと考えられる。

また少数であるが、非過去時では接続法未完了過去が要求される反実仮想表現、接続法現在が要求される目的表現、直説法形式が要求される結果表現の、副詞節各表現における誤用も見られる。

5.3. 母語別産出

最後に、接続法未来の産出を被験者の母語別にまとめる。

表 6 各コーパスにおける接続法未来の産出 (母語別)

母語	PLE		PEAPL2		CAL2	
	TLU	誤用	TLU	誤用	TLU	誤用
ドイツ語	3		11	2	15	9
ブルガリア語				1		
中国語			4	1	3	5
チェコ語			3			
朝鮮語	10					
スペイン語		1	2	1	45	20
スロヴァキア語		1				
フィンランド語			1	1		
フランス語			4		3	1
イタリア語	10			1	30	8
英語	2		19	4	11	2
日本語			4	1		
コンカニ語	1					
オランダ語			2		4	
ポーランド語	4		6		3	2
ポルトガル語	3					
ルーマニア語	3	1			2	
エストニア語					1	
カタルーニャ語					1	
デンマーク語					1	
ノルウェー語					1	
ハンガリー語					1	
ロシア語					2	2
広東語					3	1
全体	36	3	56	12	126	50

接続法未来は全体で 24 の母語話者集団に用いられている。3 コーパスにわたって TLU が見られるのはドイツ語、英語、ポーランド語母語話者のみである。ポルトガル語と類似する叙法体系を持ちながら、現代語では接続法未来が用いられないロマンス諸語を母語とする学習者の使用は、コーパスによってばらつきがあるもののゼロではなく、コーパスによってはイタリア語やスペイン語母語話者に 10 以上の産出が見られる。また、動詞の屈折を有さない東アジア言語母語話者にも一部コーパスではまとまった産出が見られる。さらに、各コーパスの母語別の TLU の相関係数を求めたところ、強い相関関係は見られなかった (表 7)。

表 7 コーパス間での母語別接続法産出の相関係数 (Seagull-Stat[®]「重回帰分析」より算出)

コーパス	PLE TLU	PEAPL2 TLU	CAL2 TLU
PLE TLU	1	0.04	0.28
PEAPL2 TLU		1	0.20
CAL2 TLU			1

以上を踏まえると、母語からの強い影響よりも、コーパスサイズや学習者個人の習熟度が強く影響していることが考察される。

6. まとめ

本稿では第二言語ポルトガル語学習者によるポルトガル語習得を、作文コーパスを通じて疑似的に考察してきた。接続法未来は全体的に初級から産出が見られるものの、接続法現在の産出と比較すると少なく、研究設問で想定した相対的な習得のしやすさはデータからは認められなかった。表現別には研究設問で想定した通り、*se*に導入される条件表現や *quando* に導入される時間表現の産出が多かったが、関係詞表現や譲歩定型表現における接続法未来の産出も多く見られた。一方で様態の副詞節表現における産出はほとんど見られなかった。また、研究設問で挙げられた接続法現在が使用されるべき文脈で未来時制として接続法未来が誤用されている例をはじめ、不定詞と混同されている例、直説法未来などと混同されて主節で用いられている例など、誤用例も多く見られた。なお、コーパスごとに産出が多い被験者集団が異なっており、被験者の母語からの強い影響は認められないと考察された。

7. 今後の課題

本稿では学習者コーパスから接続法未来の使用を考察してきた。コーパスを二次使用しての計量的分析に終始しているため、接続法未来が用いられるべき文脈での不使用など、産出された事例以外については関心の対象となっておらず、質的追研究に委ねられる。また、合計で50万語弱のサイズのコーパスを用いたが、接続法未来の産出は表現によっては一桁しかなく、習得の考察にはコーパスサイズを拡充させて追調査をする必要がある。さらに、作文コーパスを用いた本研究では話し言葉での接続法未来の産出を見ることができておらず、話し言葉での産出と書き言葉での産出の差異の研究も、今後の課題である。

8. 註

- 1) 本稿は日本ロマンス語学会第53回大会に於ける口頭発表の内容を加筆、修正したものである。
- 2) ブラジルポルトガル語では「直説法過去未来」とされる形式である。
- 3) この点から、スペイン語文法の寺崎 (1998, p.210) は接続法未来を接続法現在の別形と呼ぶべきと提案しており、本稿筆者もこの立場を支持している。
- 4) <http://www.clul.ul.pt/pt/recursos/314-corpora-of-ple>
- 5) <http://www.uc.pt/fluc/rcpl2/dados/>

- 6) <http://cal2.cluni.edu.pt/>
- 7) <http://www.cis.uni-muenchen.de/~schmid/tools/TreeTagger/>
 なお、分析には別途、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学の Pablo Gamallo 教授が開発したタグセットプログラムが必要である。<http://gramatica.usc.es/~gamallo/>
- 8) 早稲田大学の Laurence Anthony 教授のウェブサイトにて入手可能。<http://www.laurenceanthony.net/>
- 9) 早狩進氏が開発、公開する Excel 統計アドイン集。<http://www7b.biglobe.ne.jp/~hayakari/>

9. 参考文献

- Ayoun, D. (2005). The Acquisition of Tense and Aspect in L2 French from a Universal Grammar Hypothesis. In D. Ayoun & R. Salaberry. (eds). *Tense and Aspect in Romance Languages*, pp. 79-128.
- Bardovi-Harlig, K. (2000). *Tense and Aspect in Second Language Acquisition: Form, Meaning, and Use*. Malden, MA: Blackwell.
- Bechara, I. (2007). *Moderna Gramática Portuguesa, 38ª edição revista e ampliada*. Rio de Janeiro: Lucerna.
- Bento, C. I. S. (2013). *Aquisição e Ensino de Português Língua Não Materna: O Conjuntivo na Interlíngua de Falantes de Neerlandês*. Dissertação de mestrado entregue à Universidade Nova de Lisboa.
- Coimbra, I. & Coimbra, O. M. (2012). *Gramática Ativa 2*. Lisboa: Lidel.
- Collentine, J. (2010). The Acquisition and Teaching of the Spanish Subjunctive: An Update on Current Findings. *Hispania*, 93, 39-51.
- Comrie, B. & Holmback, H. (1984). The Future Subjunctive in Portuguese: A Problem in Semantic Theory. In *Lingua*, 63. 213-253.
- Cunha, C. & Cintra, L. F. L. (2007). *Nova Gramática do Português Contemporâneo; 4ª edição revista e ampliada*. Rio de Janeiro: Lexikon.
- Fleischman, S. (1982/2009). *Future in Thoughts and Language*. Cambridge University Press.
- Mateus, M. E. M.; Brito, A. M.; Duarte, I.; & Faria, I. H. (2003). *Gramática da Língua Portuguesa*. Lisboa: Caminho.
- Raposo, E. B. P.; Bacelar do Nascimento, M. F.; Mota, M. A. C.; Segura, L.; & Mendes, A. (eds). (2013). *Gramática do Português*. Lisboa: Fundação Calouste Gulbenkian.
- Salaberry, R. (1999). *The Development of Past Tense Morphology in L2 Spanish*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- 彌永史郎. (2011). 『新版ポルトガル語四週間』. 大学書林.
- 寺崎英樹. (1998). 『スペイン語文法の構造』. 大学書林.
- 高橋都彦. (2009). 『ブラジルポルトガル語の基礎』. 白水社.
- 田所清克, ペドロ・アイレス, & モイゼス・カルヴァーリョ. (2013). 『中級へのブラジルポルトガル語文法』. 三修社.
- 富野幹雄. & 伊藤秋仁. (2013). 『総合ブラジルポルトガル語文法』. 朝日出版社.
- 浜岡究. (2009). 『明解ブラジルポルトガル語—文法と表現』. 同学社.